SEO 沖縄スペイン協会
Sociedad Española de Okinawa

会報第 1 号　2017 年 11 月　後援:スペイン大使館

◆沖縄スペイン協会設立の話

琉球大学教育学部　教授　**上原由記音**

スペイン国王フェリーペ 6 世謁見

皆様、こんにちは。沖縄スペイン協会の会報をお届けいたします。

この協会の設立のきっかけは、2016 年7月に第 86 回琉大 21 世紀フォーラムに東京から駐日スペイン国大使ゴンサロ・デ・ベニート閣下がいらっしゃったことでした。私は東京で日本スペインピアノ音楽学会の会長をしており、その関係から、かねてより大使とお親しかったので、琉球大学副学長の外間登美子先生から「沖縄スペイン協会」設立というご提案を頂きました。ベニート大使がこの提案を大変喜ばれたので、私は「微力ながらお力になりましょう」とお約束をしました。

自己紹介が遅れましたが、私は 2013 年に琉球大学に赴任して参りました上原由記音と申します。スペイン音楽を専門に研究しているピアニストで、スペイン政府の助成金によって CD や著書も出しており、スペイン大使館とはヨーロッパから帰国した 1980 年よりもう 37 年のお付き合いです。

ベニート大使が東京にお帰りになってから、スペイン歌曲界の重鎮服部洋一先生のお知恵をお借りし、沖縄で色々な方にお会いしました。そしてスペインに詳しいアーティストの方々が「お力を貸しましょう！」と名乗りを上げてくださいました。それで、沖縄スペイン協会ができたのです。スペイン大使館では、ベニート大使は勿論、文化科学担当参事官のアントニオ・デオリさんも喜んでくださり、この協会はスペイン大使館公認となり、このお二人は協会の「特別会員」として参加してくださっています。

今年は 4 月に本国スペインからフェリーペ 6 世が来日なさり、私は「日本スペインピアノ音楽学会」と「沖縄スペイン協会」の代表として謁見いたしました。せっかくのチャンスなので琉装でお会いしましたら、「美しい！なんてエレガントでしょう」と喜んでくださいました。

協会の活動は、2017 年 1 月に旗揚げ公演「スペインじょ～と～」を開催し、その後、毎月、楽しいコンサートやお料理講習など楽しいイベントを行いました。

スペインに詳しいメンバーは沖縄に少なく、それぞれがプロフェッショナルで多忙のため、来年度は例会開催を隔月にしていこうと考えています。これからも変わらず、この「沖縄スペイン協会」をよろしくお願いいたします。

～～～

この展示会が開催された背景に、ふたつの理由があります。ひとつめは、昨今の大使館の方針として、東京や関西だけではなく、日本各地でスペイン文化を広めることに取り組む姿勢です。その一環として、スペイン関係の団体やスペイン人同胞が住む地域とのつながりを強化することが重要視されています。そういう意味では、昨年度発足した沖縄スペイン協会の存在は、今回の企画の大きなきっかけとなったのです。

ふたつめの理由は、沖縄の皆さんにスペインの大切な文化遺産のひとつである「サンティアゴ巡礼路 (Camino de Santiago)」を紹介することです。スペイン北西部に位置するサンティアゴ・デ・コンポステーラ(ガリシア州)を目指すこの巡礼の道は9世紀に生まれたとされており、スペインのみならず、中世のキリスト教信仰を基盤にしたヨーロッパ文化を性格づける役割を果たしました。巡礼路上にある歴史的建造物群はユネスコの世界遺産に登録されていると同時に、ちょうど 30 年前の 10 月 23 日に、欧州評議会の「文化ルート」(Cultural Route of the Council of Europe http://culture-routes.net)に指定されたのです。ガリシア州出身のフォトグラファー、故ルイス・オカーニャの作品は、幻想的な白黒写真で、サンティアゴ巡礼が駆り立てる神秘性と探求心を見事に表現しています。

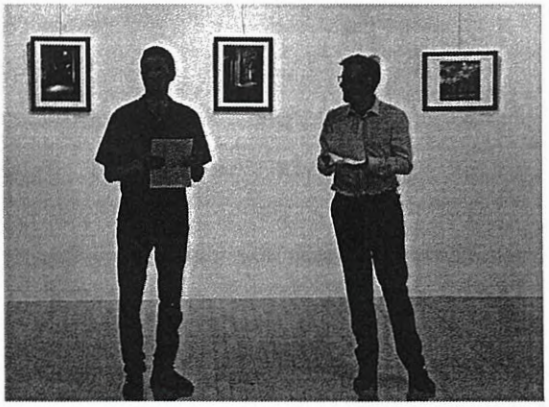
また、開催期間中にスペイン大使館のホセ・アントニオ・デ・オリ文化科学担当参事官が沖縄にお越しになったことを機に、感謝の気持ちを込めて 10 月 22 日に歓迎パーティーを開きました。そこで当協会の会員である小波津美奈子先生(沖縄女子短期大学・教授)に沖縄の子守唄(「山の子守唄」、「童神・わらびがみ」)を感動的なアカペラで歌っていただき、沖縄市スペイン語サークルのメンバーらがガリシア州の民族舞踊「ムニェイラ」を熱演しました。

複数の団体や機関(大使館、沖縄スペイン協会、沖縄市スペイン語サークル、琉球大学スペイン語サークル)の協力のもと、この企画を成功に導くことができたことに、大きな意義を感じました。これを皮切りに今後も、文化・芸術のレベルで沖縄とスペインの交流がより一層深まることを願っております。

写真展概要

期間:10月17日(火)～22日(日)
場所:沖縄県立博物館・美術館 県民ギャラリー
内容:ルイス・オカーニャ「ガリシアーサンティアゴ巡礼の聖地」
主催:駐日スペイン大使館
協力:沖縄スペイン協会・沖縄市スペイン語サークル主催

【デオリ文化科学担当参事官・歓迎パーティー】
10月20日(金)
時間:18 時スタート
場所:沖縄県立博物館・美術館 県民ギャラリー(その後、2階喫茶店へ移動)
主催:沖縄スペイン協会・沖縄市スペイン語サークル



(アルベルト先生＆ホセ・アントニオ・デ・オリ参事官)

◆スペインギターコンクールに参加して

ノエル ビリングスリー

この度第35回スペインギター音楽コンクールで優勝する事ができて嬉しく思います。10 月8日、東京都台東区生涯学習センター、ミレニアムホールで行われたコンクールは全国から35名が参加し、僕を含む6名が本選に残りました。課題曲から自由曲まで全てスペイン作曲家による作品を演奏して競い合うというコンクールで、課題曲では E. グラナドスのスペイン舞曲第5番を二次予選に、ゴヤのマハを本選に演奏し、本選自由曲には J. ロドリーゴのヘネラリーフェのほとりでと J.トゥリーナのセビリア風幻想曲を演奏しました。すべての曲が僕の大好きな曲で、もちろん緊張しましたが最終的には楽しんで演奏することができました。結果を聞いた際には本当に信じられなかったです。スペインでの講習会の参加や今後の東京での演奏会の機会を頂けたことが沖縄に住んでいる僕にとって大きなチャンスであると思います。演奏自体は僕自身が満足いくものではありませんでした。本番で力を出すことの難しさをあらためて感じさせられました。

二次予選では、ホールがどういう風に響くのかわかりませんでしたので、結構緊張しました。しかしとてもよい響きで(今まで弾いたホールの中でもトップクラスでした)本選では入る前から落ち着くことができ、ステージにあがってもしっかり自分の音に耳を傾けることができました。弾いていて気持ちよかったです。また1月28日にミレニアムホールで弾けることを楽しみにしています。今後も沖縄を拠点にスペイン音楽を中心にギター界を盛り上げていこうと考えていますので、応援よろしくお願いいたします。

～～～

てまた会えるなんて、なんか嬉しいわぁ」と声をかけてくれた。そして私が、博士課程に進もうと決意したときに、わずか 1 か月でスペインものをさらわなければならず、これを携えて博士課程の入試を受けねばならぬという、（歌の世界でもピアノの世界でもスペインものを手掛ける人がほとんどいなかったその時に）入試のピアノ伴奏を上原さんが快く引き受けてくれたのだった。博士課程の在学中も、彼女とはスペイン音楽こだまの会麻生支部を結成、ギタリストの江間常夫氏、そして私と同い年のギタリスト福田進一氏とともにコンサートも行ってきた。

今や琉球大学教育学部音楽棟の 1 階には、私たち二人の研究室が隣り合って並び、ただでさえ珍しいスペイン音楽の、その専門家が琉大に二人もいるという、贅沢な状況となっている。沖縄は、日本のスペイン、日本のカタルーニャではないかと私は、琉大に赴任して 24 年間ずっと変わらず感じてきたが、まあ、その詳細は次回に譲るとして、この地にスペインをこよなく愛し、その文化を広げていこうとする人が集うのも何かの必然があるからではないかと感じている。

～～～

私達の両手は素晴らしい楽器になりえるのです。
そしてもう一つのフラメンコ音楽の活動のパートナーにカホンを使用しております。手拍子（パルマ）と同じ役割をする楽器の一つですが、
ただ、ここで忘れてはいけないのがフラメンコにおけるカホンの存在です。
カホンという楽器はもともとペルー発祥の楽器なのですが、フラメンコギターの名手・パコ・デ・ルシアがペルーのカホン奏者からカホンを譲る受けることで、フラメンコにカホンが積極的に取り入れられるようになりましたと言われております。
フラメンコの発展とともにカホンは重要な伴奏楽器として定着し、世界中にその存在が知られるようになったといわれております。
現在では、カホンはフラメンコにとって欠かせない楽器になっています。
ギターとの相性抜群のカホンをフラメンコギタリストは放ってはおかなかったのでしょう。

カホン

～～～